

生徒の「英語」、教師の「英語」

——ギャップの実態に迫る

東京外国語大学教授 根岸 雅史

本稿では、分析編（1～8）の個別の分析結果を統合することで、中学校英語教育における、生徒と教師の実態に迫った。その結果、いくつかの点において、「英語」という教科における両者の認識のずれが見出された。この認識のずれを埋めるための方法に関して、3つの提言を行った。

1. 生徒像——「英語」不人気の謎を解く

生徒は「英語」（以下、教科としての英語は「」に入れる）という教科が好きだろうか。また、この点に関する「英語」の教師の認識はどうなのだろうか。この調査結果が出たあと、私は、ある「英語」の先生方に「『英語』はどのくらい生徒に好かれていると思うか」と質問してみた。すると、好きな生徒の方が多いという答えと嫌いな生徒の方が多いという答えが、半々ほどであった。次に、「では『英語』は教科の中で何番目に好かれているか（あるいは、嫌われているか）」とたずねてみた。いくつか予想を言ってもらったあとに、私が「『英語』は中学生には『国語』に次いで好かれていない」と明かしたところ、「『国語』に次いで」と言っているにもかかわらず、「『数学』よりは好かれているんですよ」と確認したのであった。実は、私はこれまでにこの

話を2度しているのだが、2度ともまったく同じ確認の言葉（『数学』よりは好かれているんですよ）があったのだ。「数学」は一般的に難しいというイメージがあり、また、「英語」の教師の多くが、自分自身が「数学」があまり好きではなかったために、「数学」よりは好かれているという自負（？）があるのかもしれない。

1) 英語教師は「英語」の不人気を実感しているか

今回の調査から、「英語」が不人気教科であるということが明らかになった。「どの教科が好きですか」（複数回答）とたずねたところ、「好き」という生徒が5割を超える「保健体育」を筆頭に、「音楽」「社会」などが続き、最後は「英語」「国語」となっている。しかも、それぞれ25.5%と25.0%とほとんど差はない。実質、「英語」は「国語」と並んで、もっとも人気のない教科と言っ

てもいいのである。ちなみに、「数学」は32.8%で、「英語」はおよそ8ポイントも差をつけられている。

この結果を「英語」の教師は、実感を持って受け止めているだろうか。私にはそれが大いに疑問である。日本では、「英語」はいわゆる主要教科と呼ばれ、生徒にとっての受験における重要さは、教科の中でもおそらく1、2を争うものである*。したがって、日本では「英語」はそれなりに大切な教科であると生徒に思われているために、その教科担当の教師は、自分の教える教科は少しは好かれているのだろうと考えている節がある。まして、自分が「英語」が好きで教えるようになった教師がほとんどであろうから、「英語」が嫌いという生徒の発想がなかなか理解できないのではないのか。

この調査結果に、自身がかつて行った、英語教科書の文章のトピックの好みに関する調査を思い出した(根岸ほか1997)。ここで一番人気がなかったのは、なんと「言葉に関する文章」であった。おそらく、ほとんどの「英語」の教師は、言葉に関する話はわくわくして教えているだろうが、生徒にはそのわくわく感はずしもあるわけではないということである。こうした認識のずれは、教師側のある種の「自文化中心主義」から生じていると言えるのではないのか。私たちは、知らぬ間に思い込みで物事を見てしまっていることがある。注意しなければならない。

2) 「英語」はなぜ不人気か

では、なぜこれほどまでに、「英語」は生徒に不人気なのであろうか。その理由を探ってみたいと思う。まず、決定的な理由は、「英語」がわからないからである。今回の調査結果からは、6割の生徒の「英語」の理解度が半分以下であることがわかる。少なくとも、生徒はそう思っているのである。また、理解度が低だけでなく、6割の生徒が「英語」は苦手と思っている。この苦手意識を持つ生徒は、中学入学前から1割以上存在し、中1の後半には4分の1以上の生徒が苦手になり、中2の終わり頃には、全体の6割を超える生徒が苦手と思うようになる。

実は、この感覚も、「英語」の教師と共有されていないのではないのか。教師の方は、生徒がそこまで理解できていないとは思っていないのである。6割といえば、教室の生徒の半分以上が「英語」はわからないと言っていることになるが、教師の方は、「英語」につまずいている生徒はいるにはいても、過半数がわからなくなっているとは思っていないだろう。

では、生徒は何をわからないと思っているのだろうか。この問いに答えるために、別の視点からこの問題を考えてみよう。生徒の「英語」がわからないという自己認識につながる他の調査項目としては、生徒が「受けたい英語の授業」や「英語の学習動機」があるだろう(「生徒調査」)。生徒が「受けたい英語の授業」としては、まず「入試に役立つ授業」が挙げられている。次に、「英語の学習動機」であるが、こちらも「英語のテストでいい点を取りたいから」が「英語」固有の理由としてはトップになっている。「英語」は、入試科目の中でも主要教科と考えられているために、生徒はこうした要望を「英語」の授業に対して持つのである。「英語」という教科を主に入試科目やテストとして認識しているため、この出来に満足のかない生徒は「英語」ができるとは言えなくなるのである。

これは、「英語」学習でのつまずきの認識の違いにも現れている。「英語のテストで思うような点数がとれない」以外では、「文法が難しい」や「英語の文を書くのが難しい」と、7割以上の生徒が認識している。これに対して、教師で、「文法事項が理解できない」や「テストで思うような結果を得られない」を生徒のつまずきととらえているのは3割、4割程度とあまり多くない。おそらく教師は、授業を通して生徒の英語力を実感しており、様々な教室活動はそれなりにできている感じがするのに対して、生徒の方は、テストで測られるような、いわば英語の「正確さ (accuracy)」に関して、つまずいていると感じている。

3) 「英語」のイメージ

では、「英語」という教科に、生徒はどのよ

うなイメージを持っているのだろうか。先に取り上げた「受けたい英語の授業」や「英語の学習動機」の2点から、この点に迫ってみたい。

「(生徒が) 受けたい英語の授業」は、ずばり「入試に役立つ授業」である。前述のように、「英語」が入試の「主要教科」である日本では、当然の結果といえれば当然の結果であるが、改めて考えてみるとかなり特徴的な回答とも言える。つまり、英語の学習というのは、本来は生きた人間がコミュニケーションの手段として使ったり、思考の手段として使ったりしている言語の

学習であるにもかかわらず、それを学習している生徒にはこのような認識はあまりないということである。

また、同様のことは、「英語の学習動機」に関しても言える。こちらに対する回答も「英語のテストでいい点を取りたいから」となっており、「就職するときに役立つから」や「英語を勉強すると視野が広がるから」などは、強い動機づけとはなっていない。やはり、言葉としての実感が無いのである。こうした傾向は、「英語」という教科の特性を考えた場合、大きな問題か

表1 好きな教科（主成分分析）

	第1主成分	第2主成分	第3主成分
	言語・芸術的指向	理数的指向	技能的指向
音楽	0.77940	0.04924	0.09356
国語	0.61778	0.24154	0.00808
美術	0.60519	-0.04602	0.51136
英語	0.38430	0.62140	-0.20490
社会	0.26742	0.47859	0.09923
技術・家庭	0.21830	0.19539	0.73666
理科	0.05272	0.60410	0.43439
体育	-0.02411	0.07701	0.62827
数学	-0.09873	0.76127	0.19587

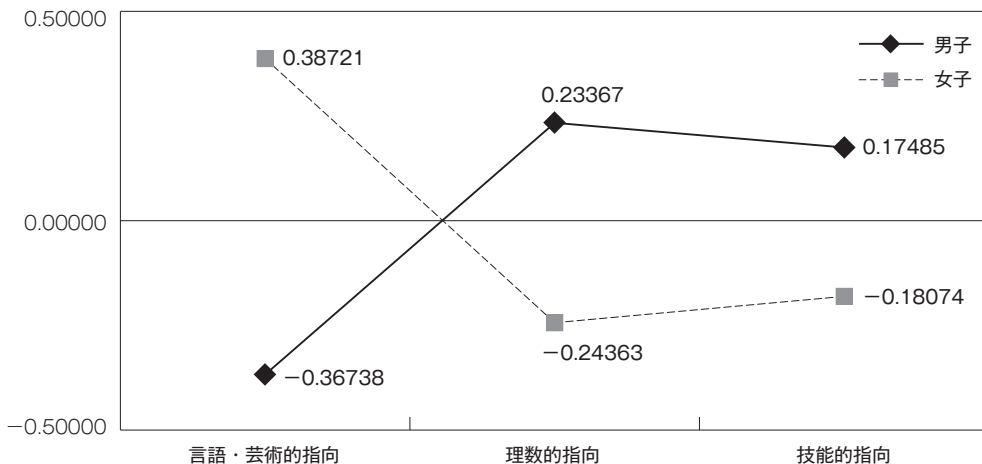
注1) 因子抽出法: 主成分分析

注2) 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法 (7 回の反復で回転が収束)

注3) 「総合的な学習の時間」は除いている。

注4) 太字は負荷量が0.50000より大きい値を示している。

図1 好きな教科の指向（性別）



注) それぞれの指向を構成する主成分負荷量の平均を性別に示した。

もしれない。

これに関して、好きな教科に関する男女差の分析結果を見てみると、おもしろいことがわかってくる。女子は「国語」を好み、男子は「理科」や「数学」を好んでいるが、「英語」はこれらの教科に比べると好みの性差が小さいことがわかる。ただ、この解釈には慎重でなければならない。「英語」は単に男子・女子に同じくらい好まれているということではなく、「英語」という教科の異なった側面が、男子・女子それぞれに好まれているという可能性があるからだ。

そこで、好きな教科に関するデータを主成分分析にかけてみると、以下のようになった(表1)。

3つの主成分が抽出されたが、それぞれ順に「言語・芸術的指向(あるいは、鑑賞指向)」、「理数的指向(あるいは、分析・適用指向)」、「技能的指向」とでも呼べる主成分である。ここで、英語に目を向けると、第2主成分の主成分負荷量がやや高いが、第1主成分にもほぼ同程度の負荷量があることがわかる。これは、「英語」という教科には、「理数的指向(あるいは、分析・適用指向)」と「言語・芸術的指向(あるいは、鑑賞指向)」があることを示唆している。

また、上記のそれぞれの主成分負荷量の平均を属性別にみると(図1)、「言語・芸術的指向」は女子が強く、「理数的指向」は男子に強く現れている。これらの分析から、「国語」好きな女子は「言葉としての英語」の側面を好み、「理科」・「数学」好きな男子は「ルールを適用したり、分析したりする教科」としての側面を好んでいるのではないかと考えられる。

「英語」という教科が、外国語として教えられている日本では、「英語」が言葉としての側面も持つが、たくさんのルールの理解とその適用を求められる教科としての側面も持つというのは事実だろう。また、主成分分析の結果からは、英語は技能科目とは思われていないということもわかったが、「使える英語」ということを考えると、使えるようになるための「技能訓練」の側面も無視できない。これらのことから、「英語」という教科の持つ多面性を認識して、

教科指導に当たる必要があると言えるだろう。

2. 教師像——異なる2つのタイプ

「教員調査」の結果から、教師のタイプは大きく2つに分かれた。1つは、音声言語重視の「言語活動型」で、もう1つは文字言語重視の「言語解説型」と言える。これは、公立の教師と私立の教師の一般的なイメージと重なる。もちろん、何にでも例外はあるが、それぞれの学校における1つの典型的なタイプのようなものである。

1) 公立学校の教師と私立学校の教師

「分析7」で公立学校と私立学校の指導方法についてみると、公立学校の英語教師は、「英語活動」「コミュニケーション活動」「グループワーク」「ゲーム」といったキーワードで、特徴づけられるようだ。これに対して、私立学校の英語教師は、このような活動に積極的であるとは言えない。これは、おそらく私立では、コミュニケーション型でインタラクティブな活動はALTに任せてしまっているからではないか。つまり、公立学校の場合は、良くも悪くもALTの使える時間が限られているために、日本人教師が言語材料導入から言語活動まですべてを1人でまかなっていると見える。一方、私立学校の場合は、一般にALTの担当時間が多く、いわゆる「英会話」のような授業が日本人英語教師の授業とは独立に存在することが多い。したがって、日本人教師には、「コミュニケーション活動」は期待されおらず(あるいは、期待されていないと教師自身が考え)、それゆえ、「グループワーク」「ゲーム」といったこととも縁遠くなる。

しかし、私立学校のこのいわゆる「分業制」には、問題点もある。「分業制」では、日本人教師の授業ではルールを説明し、ALTの担当時間ではコミュニケーション活動を担当するというようになっていることが多い。しかしながら、日本人教師が教えていることをALTが使えるようにしているとは限らない。また、もっぱら説明ばかりしている日本人教師の授業には、コミュニケーションのための意味のやり取りがな

く、日本語による説明ばかりの退屈なものになりがちである。私立学校における日本人教師とALTの連携をうまく機能させるためには、シラバスを共有した上で授業内容に関して綿密な連絡をとる必要がある。また、解説だけの授業が、どれだけ言語習得に寄与しているのか、再検討する必要もある。

また、今回の「教員調査」から、中学校の英語教師の、小学校における英語教育（活動）の理解不足が明らかになった。特に、私立学校は特定の地域に根ざしていないために、その教員は入学してくる生徒の英語学習の背景をあまりよく理解していないということがわかった。小学校に「外国語活動」が正式に導入されるこの時期には、とりわけ生徒が英語に関してどのような状況で入学してくるのかを正しく把握しておく必要がある。従来であれば、おそらく帰国子女や留学生などへの配慮だけで十分であったかもしれないが、これからは他の「一般生」の実態把握も重要である。なぜなら、この「一般生」は従来の入学者と異なっている可能性もあるし、また、たとえ同期の入学者であっても、みな同じというわけではないからである。

2) 教師のジレンマ——「入試」か「コミュニケーション能力の育成」か

今回の「教員調査」から、教師には入試指導をとるか、コミュニケーション能力の育成をとるかのジレンマがあることがわかった。高校入試が目前に迫っている公立中学校で教える英語教師は、次の入試である「大学入試」がまだ先にある私立中学校の英語教師に比べ、はるかに「入試」に対する意識が強いのかもしれない。これに対して、中高一貫校の私立学校の教師の場合は、生徒や保護者のニーズとして「大学進学のための英語力」というものがあるものの、もう1つの大きな柱である「国際的に通じる英語力」というニーズに対応しようとする傾向がある。

問題は、入試対策のための英語指導とコミュニケーション能力の養成とは別ものにとらえている教師が多いということである。おそらく、「基礎・基本」がしっかり身につけていても、それ

を実際に運用する力を育成できない、という教師の悩みも、根底では上述のジレンマとつながっているのではないだろうか。おそらく「入試」に対応すると考えられている「基礎・基本」は、明示的な規則の理解にとどまっており、実際に使えるようにする練習などは含んでいないのではないかと考えられる。だから、いくら「基礎・基本」を「身につけても」、運用する力は育成できない。

3. 提言

以上の分析結果に基づき、具体的な提言を行う。

1) コミュニケーションの実感を

まずは、教師も生徒も意識として、英語とは生身の人間が日々使っている現実の言葉であるという認識を持つことが大切ではないか。そして、授業の中では、この認識に基づいた言語活動を展開するとともに、英語と生徒自身の関わりについて、テストや入試以外の関わりを常に意識させることが必要となる。

2) 使えるようにするための大量の練習を

次に、英語の習得に当たっては、使えるようにするための大量の練習が必要であるという認識を教師と生徒が共有することが重要である。「テストや入試」「文法」といったものから連想される知識は、いわゆる「宣言的知識 (declarative knowledge)」と言われるもので、ルールなどを明示的に言葉で説明できるような知識のことである。しかしながら、英語を実際に使いこなすには、これらの知識は自動化され、意味に焦点を当てながら半ば無意識のうちに使えるようにならなければならない。このための大量の練習は、どの技能であっても、着実にそして継続的になされなければならない。

3) コミュニケーション能力を測るテストを

今回の調査で目についたのは、「英語」のテスト（入試も含め）が実際のコミュニケーションとまったく別ものにとらえられている点である。もしこれが事実であるとする、本来の授

業で目指すものとテストで評価されるものが異なっていることになる。このままでは、いくら教師や生徒が「英語」の学習に時間をかけても、結局は「使えない英語」を身につけるだけで終

わってしまう。テストをコミュニケーションにすることで、「テストへ向けた学習」が「コミュニケーション能力を高める学習」につながるようにすることが必要である（根岸ほか編 2007）。

<注>

*最近知った話であるが、たとえばフランスでは、「英語」は「音楽」や「美術」の実技のような、一種の特殊技能の教科として認識されていて、その地位は「数学」や「フランス語」などに比べると相当低いらしい。したがって、外国語としての「英語」が主要科目であるというのは、ユニバーサルなことではない。

[参考文献]

根岸雅史（代表）・桐生直幸・栗原幸子・田中敦・長沼君主・藤原愛・松下佳恵・山田隆周，1997，「リーディング教材の興味に関する調査（I）」『語学教育研究所紀要』第11号：41-68. 語学教育研究所。
根岸雅史・東京都中学校英語教育研究会編，2007，「コミュニケーション・テストへの挑戦」三省堂。